

狭山市議会議長
斎藤 誠 様

研修議員氏名 高橋ブラクソン久美子 ㊟

研 修 会 報 告 書

このことについて、次のとおり報告します。

1 期 間 平成 30年 1月20日～平成 年 月 日 (泊 日)

2 研 修 会 名

2017 連続講座第10回 分断進む世界と日本社会を考える 昭和・平成、そして新しい時代へ

3 研修会主催者

(公財) 市川房枝記念会 女性と政治センター

4 開 催 場 所

婦選会館

5 研修会スケジュール

講演：13：30 から 15：30

講師：保阪正康氏 (ノンフィクション作家・評論家)

6 研修会概要

講演内容を書き記す。

まず、憲法について：現行の憲法は平和憲法ではなく、非軍事憲法である。これを平和憲法にする努力があるし、それは歴史の教訓を学ぶことである。論理的に考えれば、第3項を加えるということは、軍法規を整えなければならない。すなわち、軍法会議など今の司法体系とはパラレルな法体系を作り出さなければならない。こんなことをすることは、先の大戦において、特攻で死んだ若者、遠く外国で餓死した兵隊等に関して反省をしていないということである。その反省のないところは、戦後の恩給制

で階級によって恩給が決まり、軍幹部への手厚い保護などにもみられる。軍幹部は戦争責任を取ってはいない。

今安倍首相が提唱しているような改正は戦前への回帰である。300万人以上の日本兵士が死に、何千万人という人を殺したことをきちんと総括するべきである。追悼、慰霊などは必要であるが、偽善でしかない。なぜ若者が中国の奥地で、ニューギニアのジャングルで死ななければならなかった必要は何だったのだろう。

日本人は戦争を知らなかった。戦(いくさ)はあり、それは他国を侵略して奪略することであった。日本人は日清戦争で戦果を挙げ、多くの報奨金を得た。戦時中の増税に耐えた国民への褒章だった。国民は熱狂した。日露戦争の時には、報奨金は与えられなかった。ロシアにしたら負け戦ではなく、戦争を止めただけだからだ。この際、報奨金もない戦争終結にたいする国民の怒りは大きかった。

第1次大戦後に、日本は世界で響きをかかった。なぜならば、戦争からの戦果・報奨金を多額に要求したからであった。しかし、この厚意は世界的に嘲笑されるだけであった。しかし、日本はあまりにも傲慢になり、世界の中で孤立する要因にもなった。のちに連盟脱退に発展し、米英からの支援も遠のいた結果となった。

その延長線上で日本は第2次世界大戦に突入し、隣国のみならず、太平洋諸国諸島まで戦争をし、戦果・ガソリンなどを獲るといって戦を構えた。幼い戦争への考え。保阪さんは日本には戦争学を学んだものがいなかったという。戦略ではなく、戦争学は止めるときまでの学問で、戦争をいかに回避するかということが主眼である。

天皇を考えなければならない。天皇は国体として政体から引き離し、憲法から除外して権威として京都に在るべきではないか。江戸時代のように。

明治天皇は軍によって神格化され、天皇のために死ぬという論理を作り上げた。軍人勅語をつくり、政治に軍が介入した。江戸時代の権威としての天皇(国体)から政体の統括者として性格が替えられた。

大正天皇は文人天皇だった。文化国家を目指したが、帝国主義の天皇ではなかったの
で、おろされた。

昭和天皇は明治天皇を規範とした。要するに君主制下の民主主義体制をした。戦後、立憲民主制下の天皇であるとしたが、彼は本質的には変わることではできなかった。

平成天皇は自ら憲法を守り、それであるから天皇であるとした。政体(民主主義体制)の下に国体(天皇)と規定している。これは初めてのことで、天皇の国ではないことを示す。

天皇の務めは皇統を守ることに尽きる。手段は祈ること、儀式を守ること、戦争をすることがある。先の戦争は戦争をしなければ日本は滅びるという考えによる。戦争下では軍事費は一般会計の40%から80%にも上り、特別会計は一般会計を上回った。実際は戦争や革命は君主制を破壊する。

昭和天皇は帝王学を学び、天皇の名において行われることは自分の責任ではないと教えられた。平成天皇は天皇も一国民であると認識しているようである。

平成のキーワードは天皇・災害・政治であろう。天皇は昭和を総括し、象徴天皇であろうと模索した。災害は災害史観をもたらす。政治は劣化し、負のものを背負い込んだ。平成天皇は象徴天皇であることを国民に理解、共感を求めた。昭和の清算を追悼ということでしたが、これは戦争を風化させないというものではなく、祈るという天皇としての務めである。被災者への慰めを昭和天皇はなさらなかった。平成天皇は目線を国民と揃え、被災者としての個人は被災者の代表という理解だった。

戦前の関東大震災以降は災害史観にとらわれ、文化は自然の前にむなしいものだという考えを蔓延させた。退廃的な文化がはびこり、自殺なども増えた。朝鮮人や社会主義者の虐殺は情報閉鎖社会において噂が自己増殖し、恐怖をあおり、惨殺にまで進ませた。情報閉鎖集団にならないように情報をオープンにするべきである。「噂のウソ」がわかる社会にするため、また自分の倫理や道徳を守るためにも情報が大切である。人災というのは、情報の不平等さにあるのではないか。例えば、原発事故の際のウソや、わざと情報をシャットダウンし（隠蔽）、一部の人間にだけ正しい情報が与えられるという不平等さはあの原発事故の際にもあった。これらの災害による情報の不平等さの結果は後に出る。

政治制度は円熟したとして小選挙区制度、2大政党による政権交代可能にするというお題目は、政治の劣化をもたらしただけである。制度と人が崩壊した。ファシズム（ナショナリズム）はデモクラシーの後をついてくる。行政主導、官僚支配がファシズムを作り上げる。

平成の政治は怖いように行っている。自制心がなく、開き直る、罵倒する。とどまることを知らない。理論も見識も捨て去ってしまう。

逆に、人が一心に働き、効率を求めるとき、群集として人は無目的で走り出す。一生懸命は決して美德ではなく、ファシズムを生み出す。「天皇は神」「国民は臣民」こんな言葉が無反省に受け入れるようになる。

明治150年というが、それはまさに薩長史観を喧伝、宣伝するためにされるだろう。明治維新は江戸時代を壊した。西軍（官軍）は東北地方を蹂躪し、略奪した。長い間、賊軍（東軍）と言われた地方の人が官僚で高位につけなかった。幕府側・賊軍からみた明治のご一新を検証することも大切だろう。明治50年、100年、150年の節目に長州（山口）からの首相であることは、まだまだ明治維新を引きずり、戦前へ、

さて、私は新潟県の長岡で生まれ、育った。長岡藩は、（正しいことかどうかはわからないが）、賊軍として戦い、城も金もすべてを失った。新潟県という県名も長岡県にした。くない明治政府の考えがあったとも伝えられている。あの明治維新という名の革命において、勝者は明らかに長州だった。その政治は続いている。彼らにとって、権力・権威は武力によって勝ち取るものである。しかし、民主主義は暴力・武力を排除するたツ一巢として登場したのではないか。

明治150年。初めの80年は戦争まみれ、後の70年に平和が訪れ、経済も発展してい

る。私たちはやはり平和でなければ、幸せになれない。憲法改悪を考えている自民党政府。憲法とは何かをしっかりと考えてほしい。9条に自衛隊を書き入れるだけというのはおためごかしである。保阪さんが言うように、ここに書き入れられたならば、司法も変わり、軍による恐怖政治が始まる可能性が高い。日本において、文民政治、軍の文民統治が行われなかった過去をもっと知っておくべきだろう。保阪さんが言うように、なぜ先の大戦で若者が外国で餓死するような戦争に至ったかをしっかりと反省すれば、憲法改正（改悪）などとは言えないはずである。戦争をしてはいけない。